

武士道を現代に見直す

戦わないために心をどう武装すればよいのか

世界における日本の心と内村鑑三や新渡戸稲造が考えた武士道。その神髄は戦わないために心をどう武装するかにある。まさに現代日本に求められるモラルなのだ。

聞き手は小島英照編集委員

「最近の戦を知れと言いたい事柄が多すぎます。日本は経済大国になったが、精神的バックボーンが欠けた国になってきている。何かを求めるとすると、今や死語に近い武士道を再認識する必要があります。どのように思うのですか。」

高橋 日本では近代化や高度成長といった形で、心という人間性をどこか開放してしまっている。国際化がいわれ、それはそれで大変結構ですが、日本人というものを希薄にしてしまった。国籍が曖昧な日本人は、ただお金を手っ取りで、外国の人たちも頼もしいとは思ってない。日本人が普遍的なものを求める形で考えているというところがないと、お金がなくなると時が経てば切れる。では日本が日本であるものをどう考えるか。そういうモラルを、いじめのあつちを考えると



「武」は「ホ」を止める字義 理想を果敢に実行する時代到来

武士道以外はない。たまたま戦いの中で育てられた道徳でしか、少なからず戦前考えられたような意味では危険だし、これもまた受け継がれている。

「明治期に新渡戸稲造が世界に向けて『武士道』を書いた。それ以来、高橋 彼が内村鑑三が先鋒を出して、内村は武士道が日本の一番の宝物だと思つた。ただ戦争を抜きで、今、まじめに考える必要はないかという。ウツをつかなくていい。それが世界で最も立派な道徳の一つではないかという。

「戦をするために鍛え上げた道徳を、平和のための戦いのモラルとするというわけですか。」

高橋 私の解釈は武の武の字が本来どういう意味なのですか。武は又(又)を止める。つまり戦わないために心を武装するかを真剣に考えることが必要です。武士道に説くべきものは、本来あるべき原点に戻って、これからの理想を突き詰めたものを、その通りに実行する時代に来ているというところだと思います。内村はリス



高橋 富雄氏

たかはし・とみお 1921年岩手県生まれ。東北大学卒、文学博士。同大教授を経て名譽教授。現在、盛岡大学学長。「奥州藤原氏四代」「蝦夷」「戦経伝説」「日本史。東と西」など著書多数。

高橋氏の武士道論は、まず「武士道の歴史」(全三巻・新人物往來社)で武士道論の側面からとらえる。その武士道史は、平家物語に源をもつ物語史の和辻哲郎に継承された精神史②マックス・ウェーバーの社会学③基礎方法論の総合の上に立つ。姉妹編である

ほん+本

「武士の心 日本」(十巻・近藤出版社)ではこれを日本の心、日本精神とつづいて、その心のかかわり、その特徴を展覧。面書きを併せて日本精神史の興味深い研究書になっている。なほ新渡戸稲造の「武士道」は岩波文庫に収められている。



「ならぬことはならぬ」「会津武士道」の教え

「情病を知え」といのはいい言葉ですね。

高橋 もう一つ「ならぬことはならぬ」ものであります。これは会津藩の子供たちの言葉がある。「白は白、黒は黒」といっています。遊学時、武士の子供としてやらない卑劣な行為、人をいじめたり、隠し事をし、そういうことを絶対しないことと打ち合わせ、最後は反省会をやって、この原則に合わない人はみんなの前で、無念を立てること、すみませんと謝罪する。結局、この心が会津武士道になった。関係者に、外務大臣と総理大臣がイエス、ノーを明確に言えるようになったら、日本は驚くべきことだ。

高橋 みんなを殺したのがいいというところ、あの段階でああかきでないと考えなきゃなりません。信長が延暦寺を焼き討ちしたようなものです。今からみると、むしろ文化の敵です。しかし比叡山をのまにたてたのは、日本は別な形だめになった。

「死に場所を心得ている」といっている。敗者において自立します。高橋 慎重に構えた人は普通の死に方をします。武士道的な死に方をした人だけが死を心得た人ではなく、家康のように最後まで生きるといふ形で武士道を貫く生き方もある。吉田松陰もそうです。獄中で書いた留魂録をみると、最後まで生きる望みを捨てない。至誠をもって真の動かない人はない。静野も静かにひんじゅと説いたなら分かるだろう。最後までもと。いよいよ明日、殺されそうという内報がきた段階から生きるとを全然思わない。ギリギリまでしなげやならないことをやる。死を絶対に急がない。しかし、死が決まった瞬間から死を急がない。それが武士道における生死です。これで三十歳ですから、井伊直弼とは敵同士ですが、それだけの形で東西の横綱です。

高橋 人間として最高に評価する人で、江戸時代に平和とか学問をむしろ武士道の前に押し立てた。今日では平和国家のかけ取りをしたわけです。それから井伊直弼。哲学が生活にちゃんと現れている。徳田門外の変の朝、井伊邸に襲撃計画を告げる投書があったが、自分だけが開けてみても言わなかった。ある意味で無謀にみえますが、どうなるかわからないことを、あれこれ考える人ではなく、あつちをつけて、神様にしかわからないことをやる。一期一会ですよ。

92.3.14 日経新聞